2024年（令和6年）
第68号
（3月1日）

平安だより

HEIAN letter

発　行　所：立正佼成会　京都教会
発行責任者：渉外部長　澤村悦玄
編集委員長：渉外広報　植田恭司
〒605-0041　京都市東山区三条東町 230
TEL (075)762-2211　FAX (075)762-2266

今月のことば　～「慎み」は、「慈しみ」から～　西京支部会計　篠原佑季

今月は西京支部の篠原が担当させて頂きます。よろしくお願いします。

我が家は主人、私、息子、娘の４人家族です。今年は主人が定年退職を迎え、子供たちも進学し、それぞれ 新たな環境での生活が始まります。 また、主人と私は還暦を迎えます。還暦は産まれた年に戻ると教えて頂いていますので、新たな気持ちでスタートする年にしたいと目標を立て、寒修行に入らせて頂きました。今年の目標は「ありがとう」を伝えるです。
息子が毎日「ご飯、美味しかった。ありがとう」「お弁当、美味しかった。ありがとう」など沢山のありがとうを伝えてくれます。心も顔も笑顔にしてくれます。そんな魔法の言葉を私も皆さんにお伝えさせて頂きたいと思いました。

平安だよりのお役のおかげさまで、佼成３月号の家庭輪読会をさせて頂きました。今月のご法話では「慎むことも思いやりの心を深めるもので、慎みとは慈悲と一体のもの」と教えて下さっています。
私はいつも良かれと思って言った事で子供を怒らせてしまう時がよくあります。息子は私の言い方は上からで、主人は提案してくれるのだそうです。言い方が問題なだけで、言われたことは納得できると話してくれました。家庭の中の実践は本当に難しく、わがままが出てしまいます。慎み深いとはかけ離れた私です。でも子供から言ってもらえたことに感謝しています。

昨年末に福島に住む実母がアルツハイマーと診断されました。何でも相談し合う仲でしたので、色んなことを忘れていくのだと思うと悲しくてたまりませんでした。すでに忘れることも多く、同じ話を繰り返します。 聞くのがしんどい時もありますが、母の声が聞けて会話できる今がありがたく感じています。病気を通して私が皆様の話をしっかり聞けるように訓練してくれている、と気づかせて頂きました。

「慈悲とは慈悲の実践で熟していく」と教えて下さっています。すぐに忘れてしまう私ですが、慎みを忘れず心に寄り添える自分に近づけるよう精進させて頂きます。沢山の「ありがとう」を皆さまにお伝えしていく１年にさせて頂きます。ありがとうございました。
合掌

青年部健幸行　～少年部員がチャレンジいっぱい～

２月 11 日、青年部健幸行が行なわれました。
９ 時の読経供養の聖壇には、青年総務が車椅子駅伝ボランティアへの祈願も込めて導師に座り、鐘と木鉦は初体験でした。副導師は少年部員が務め、太鼓も揃って、ズラリと並んだ青年部員の姿を見た法座席の会員は、ものすごく感動した様子でした。事前に聖壇役員から指導があり、貴重な体験が出来ました。
９ 時の聖壇を見ていた少年部員が、12 時の唱題修行に立候補を表明し、急きょ太鼓を少年部メンバーに変更するなど、青年部の健幸行ならではのチャレンジいっぱいの１日になりました。
読経供養後は法座席の掃除機かけや靴箱掃除なども女子部員と少年部員で行ない、皆がそれぞれに何かひとつ教会での役割を務められました。

午後からは体育館でバスケットやバドミントン、食堂では婦人部長のクッキー作りを教わり、楽しくありがたい健幸行になりました。

平和を祈る　～私の戦争体験～

やくしん３月号に会員の戦争体験が掲載されました。 今一度、平和の大切さをかみしめたいと思います。戦争の語り部が少なくなってきています。私はこのような体験をしたという方は、渉外部や文書部までお知らせ下さい。

平和を祈る
私の戦争体験

平和という言葉を知った日

松井光三（90）　京都教会

私は瀬戸内海に浮かぶ因島（広島県）で生まれ育ちました。戦争が始まった昭和十六年。全校児童約五十人の椋浦国民学校に入学して二回目の冬、上級生に「みっちゃん、戦争になったようだよ」と声をかけられ「ほう、そうねえ」と訳も分からずに答えたことを思い出します。ラジオから戦局放送が流れ始めて、ようやく日本が戦争状態になったのだと実感しました。そして私たちの島にも軍国主義はやってきたのです。学校生活は一変。教室前面に真珠湾攻撃で殉死した軍人の写真が飾られ、授業はなくなり、私たちは甘藍（キャベツ）や麦・甘藷（さつまいも）作りといった農作業や木桶ですくった海水を炊き上げて作る、昔ながらの塩作りを手伝うようになりました。

働ける大人はみな徴兵検査を受け、赤紙が来ると、八幡神社で村を挙げての激励を受けて軍隊に入隊しました。二人の兄も予科練に入隊。島には老人と女性、子どもばかりが目立つようになりました。それでも島にいると、戦争は遠い世界のことに感じられ、私たちは農作業を終えるとコマ回しに興じたり、手製の凧を海辺で揚げたりと、友だちと遊ぶことができました。やがて食材は配給制となり、雑貨屋を営むわが家でその袋詰め作業があり、私も手伝いました。食材の融通が利くこともあり、友人から「みっちゃんちはええなあ」と言われたものです。

小学六年になったある日、大阪の方角から西へと向かうB－29の編隊を目にしました。瀬戸内の空を悠々と飛ぶ姿が印象的でした。それから数日後、農作業で校庭にいた私たちに、校長先生が「グラマンが来る！　林の中に逃げえ！」と叫びました。逃げ込んだ茂みから海岸が見え、小型機が六機、機体を突然方向転換させ、急降下し始めたところでした。その先には島の造船所がありました。地上から放たれた砲弾が、当たらずに破裂して紫色や赤色の閃光を放つのを、〈打ち上げ花火みたいや〉と思って見ていました。

八月六日。広島市内に新型爆弾が落とされたことを翌日の新聞で知りました。島には爆音も届かず、きのこ雲も見えませんでした。それから数日が経ち、海水くみの作業をしていると、古老がやってきて「平和になった、平和になった」と叫びました。その意味を、仲間の誰一人、分かる者はいません。平和という言葉を教えてもらわなかったからです。予科練に行った兄たちは無事に戻ってきましたが、多くの若者が軍国主義に突き動かされ、命を散らしました。そのことを決して忘れてはならないと思っています。